



Title	マイラー・アーンチャルにおける若干の地方語彙について
Author(s)	三木, 雄一郎
Citation	印度民俗研究. 1995, 9, p. 51-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50298
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マイラー・アーンチャルにおける
若干の地方語彙について

三木 雄一郎

ファニーシュヴァルナート・レーヌーの小説「マイラー・アーンチャル」(1954)は、ヒンディー文学に「地方小説」の呼称とジャンルを定着させ、それ以後地方の農村を舞台とする多くの小説が輩出する契機となった記念碑的な作品である。カメラのレンズを思わせるような作者の目は独立前後のビハールの農村の姿を土地問題からカースト、政治運動、さらには祭礼や俗信、日常生活の些事にいたるまで克明にあますところなく捉えている。そしてその独特の写実的な文体を支えるものとして見逃せないのが地方語彙(sthānik śabd)の多用である。標準的なヒンディー語辞典には記載されていないような語彙が民謡の歌詞はもちろん、会話部分や地の文にまでふんだんに用いられている。確かにそれらは同じヒンディー語地域であっても他地域の読者にとっては理解不能もしくははなはだしく理解困難なものが多いため、ストーリー性の欠如も加わって結果的にこの作品を読みにくいものになっているという批判¹はその限りにおいて正当なものである。しかしそれらの語彙を使った作者特有の語り口が、作品を土の香りのする地方色豊かなものとし、そこに住む人々の息吹を伝える上で少なからぬ効果を上げていることもまた事実である。小稿ではこうした語彙のうち典型的なものをいくつか選んでその意味を記し、必要に応じて用例をテキスト(Phanīśvarnāth Reṇu, *Mailā Āmcal*, New Delhi, 1982, 12th ed.) およびその他の文献から訳出した。なお語彙の選定にあたっては、標準的な辞書とされる *Hindī Śabdsāgar*, Banāras, 1965-75 (以下HS) および *Mānak Hindī Koś*, Prayāg, 1964 (以下MHK) に、見出し語として記載されていないことを原則とした。ただし類似の語形が記載されている場合はそれを明記した。

ところで筆者は94年の暮れから年明けにかけて、作品の舞台となっているビハール州アラリヤー県(旧ブルニヤー県の北部)を旅行することができた。いわゆるミティラー地方に属する地域である。パトナ市在住の詩人ジテンドラ・ラートウル氏らの案内でオウラーヒー村(レーヌー・ガーンヴ)にあるレーヌーの生家を訪ね、わずかに数時間ではあったが村の人々にいくつかの地方語彙について直接質問する機会に恵まれた。日本でいくら調べても意味がわからず現地を訪れて初めてわかった言葉もある。40年以上前に書かれた作品に登場する語や慣用句が今日でも作者の生まれた村で使用されているのを知ったときは、思わず興奮で声が上ずってしまった。またラートウル氏からは作中のいくつかの地方語彙がU. P. 州境に近いビハール州西部に位置する氏の出身の村でもそのままの形で使われると教えられておおいに驚いた。ここにあげた語彙の解説の多くはこれらの方々のご教示によるものであり、深く感謝の意を捧げたい。これらの聞き取りをはじめ、各語彙の意味を考える際の参考とした資料は以下のとおりである。

¹たとえば、Mahendra Caturvedī, *Hindī Upanyās; Ek Sarvekṣaṇ*, Dillī, 1962, p.211 新しく「マイラー・アーンチャル」を読む人のために

- B B Nāgārjun, *Bābā Baṭesarnāth*, New Delhi, 3rd ed., 1975
 B L Nāgārjun, *balcanmā*, Allahabad, 2nd ed., 1956
 G Grierson, G. A., *Bihar Peasant Life*, Delhi, reprinted, 1975
 J Phanīśvarnāth Reṇu, *Julūs*, New Delhi, 6th ed., 1983
 K Pāṇdeya, V., Śāstrī, S., *Kṛsikoś*, Patna, 1966
 N Nāgārjun, *Naī Paudh*, New Delhi, new ed., 1980
 O オウラーヒー村の人々の教示。
 P P Phanīśvarnāth Reṇu, *Partī Parikathā*, New Delhi, 1961
 R ラートウル氏の教示。
 R C Nāgārjun, *Ratināth kī Cācī*, Allahabad, 2nd ed., 1953
 S Śāstrī, T. N. L., *Maithlī Lokgītō kī Adhyayan*, Agra, 1962
 T Phanīśvarnāth Reṇu, *Thumarī*, New Delhi, 1981, 6th ed.
 U *Mailā Āmcal* (in Urdu), National Book Trust India, New Delhi, 1975

V パトナのクマール・ヴィマル博士の教示。なお見出しとして取り上げた語彙には () を付したが、その中でローマ数字はテキストの第1部と2部の区別を、アラビア数字は章を表わす。また*は同一の章に当該の語が2度使用されていることを示す。

1、 paliyā ṭopī (I—1)

折れ目のない舟形の帽子。すなわち折れ目によって二つの部分に (dupaliyā) 別れておらず、全体が単一の部分 (ek pallā) として構成されている舟形の帽子。[以上R] 「果樹園のそばまで来るとヴィシュヴァナートブラサードは隠しからパリヤー帽を出して被り、カーリーのほこらの方を向いて女神に祈った」

2、 Koṛ kamān (I—3、33、II—21)

田畑の除草に用いる鋤。またはその鋤を用いた除草作業。[以上O] 「野良仕事は一週間お休みじゃ。旦那衆に言うて下され。鋤も草取りの鋤もしばらくしまっておいてもらおう」(I—3) 「田畑の除草をしなければイバラが生えるように、地域で集会を開かなければ、その地域もだめになってしまうのだ」(I—33) なお (II—21) にはこの鋤とともに cauṁgī, bidhā, kādī · gorā, dhanakaṭaṇī などの農具が登場する。

3、 rām · ḍandī (I—4、II—8、20)

オリオン座の三つ星 (唐鋤星、参星) を指す。文字通りは「ラームの杖」の意味。[以上O、R] 「よし、鬼女め、出てきよったか。ちょうど12時じゃ。三つ星が頭上にきた」(II—8)

4、*situā* (I—6)

(砂糖をこそげるのに用いる) 貝殻製の小さなさじ。 G [p.59] に A scraper of removing the layer of clean sugar. When made of shell ,it is called *situa* , or is South— West Shahabad *situha* ,or *sutuha* . とあるのに 拠った。「朝に4セル、夕方に3セルの乳が搾れた。しかしばあさんは、ヨーグルトひとさじすら口にさせてくれなかった」 H Sは地方語彙として *situī* を記載して「池の小貝」と記し、言い換えとして *sutuhī*, *situhī* の2語をあげている。したがって *situī* と *situā* は同系の語である。ちなみに *sutuhī* の意味には、幼い子供にミルクを飲ませるのによく用いる小貝、ケシからアヘンを掻きだすのに用いる貝、漬物にするマンゴーを剥くための貝などがあげられている。なお、M H Kは *sutuhī* と *situhī* のみを記載し、*situī* は取り上げていない。

5、*khopsahit · kabūtarāy namaḥ* (I—6、37)

khop は鳩小屋。鳩小屋もろとも鳩が潰れてしまう、が原義。慣用句として、ある家が住んでいる人間も建物もともに滅び去ってしまう、跡形もなく失われてしまうこと。[以上O] 「イギリスは今また手を弛めておるだけじゃ。それで皆飛んだり跳ねたりしておるのよ。じゃが今度怒ったら、鳩も鳩小屋ももろともに…」(I—6) 「…すべては我々の手の内にあるのですからな。何ならこう証言しましょうか、ええっ閣下。すべてこんないい加減なことをするように命じられたのは私です、と。そうして書類や手紙、書き付けの類を公にしたら、もうそれまで。鳩も鳩小屋ももろともに潰れて…」(I—37) また J [p.150] にも次のように用いられている。『わしはたった今パキスタン部落から戻ってきたところです… 奴がトラックで来とります』『何でまた?』『鳩も小屋ももろともに潰しちまおうとしとるんです… 娘と一緒に親父もお袋も、みなトラックに詰めこんで連れて行くっちゅうとるんです』

6、*pachiyārīṭolā* (I—7、I I—1)

西の (*pachiyārī*) 集落 (*ṭolā*)。[O] なおこの語は *picharyārī ṭole* の形でもあらわれる。(I—37) また「西の」を意味する形容詞には他に *pachawariyā*, *pachawariyā* があり、西方のカーヤスト (*pachawariyā khaith*) (I—10)、西の棟 (*pachawariyā ghar*) (I—38) などの用例がある。

7、*dhorhā sāṃp* (I—9)

水辺にすむ無毒の蛇。両手を広げたぐらいの大きさまで成長する。[O、R] 「壺が波にゆれた。すると中からドーラー蛇が鎌首をもたげ、『ヒューヒュー』と息を吐きはじめた」

8、jarīdahār (I—15)

日照り (jarī) と洪水 (dahār)。[O] 「タフシールダールの脱穀場は大脱穀場と呼ばれている。たとえ日照りや洪水に見舞われても二千マウンドの米が集まる」 ちなみに U [p86] には訳語として sūkhā aur bāṛh が与えられている。

9、mūlgain (I—15、II—1)

音頭取り。ビダーパト (ヴィドゥヤーパティ)・ナーチなどの民間芸能の一座で、歌い手衆の中心として最前列で歌う者。[以上 V] 「リバドゥーは踊り (ビダーパト・ナーチ) の音頭取りじゃ。音頭取り、つまりミュージック・ダイレクター」(I—15) 「コーヤルーが小長太鼓打ち (kholwāhā) で、シーターナートバーブーが音頭取りだ。年はとってもシーターナートバーブーの声は実に力強い」(II—1) また、J [p102] にも用例がある。「一方、一座の者たちは音頭取りのカーレーと一緒に歌いはじめた」なお MHK は mūlgaun の形で地方語彙として記載し、「踊りや歌の一座で他の仲間の者たちに踊りや歌を教える人物 (東部)」との語義を与えている。まさに上記例文のミュージック・ダイレクターにあたる。

10、jamīnkā (I—15)

幕開け前の呼び込みの太鼓のリズム、呼び込み太鼓 [O] 「ビダーパト・ナーチの長太鼓 (ムリダング) が呼び込みを打っている。さあこい、さあこい」 また T [p134] にも呼び込みの意味が明瞭な用例がある。「ラールモーハルは言った。『まだ幕はあがってらん。今 jamīnkā を打っているのじゃ、客を集めるためにな』」

なお、calantī (I—15) もリズムの名称で、J [p57] や PP [p116] に用例があるが、どのようなリズムかは不明。

11、alhuā (I—15)

サツマイモ、甘藷。S [p282] に alhuā = śakarkand とあるのに拠った。[「次は果物と干し果物でござる、閣下」]「それウドンゲノキたたえい、イチジクたたえい、サツマイモたたえい」] またこの語は、BB [p57] には aluā の形で用いられている。「(お前のおばあさんは) 5 カッターの畑をサツマイモ (śakarkand) の蔓でいっぱいにした。それで、15 マウンドのサツマイモ (aluā) が獲れたのじゃ。... マーグ月になると別の 3 カッターの畑にもサツマイモ (aluā) をすでに植えておった」

12、ḍhīp · ḍhāp (I—15)

でこぼこの土地 [O] , 「路地も測って、でこぼこも測って、水汲み場や道も測って、」

13、phaṭaknāth · girdhārī (I—15、II—6)

一文無しで他人の施しを求めて歩く者 [O], 「皿を売った金をパトワリーに渡し、つるべを売った金をチョウキーダールに渡す。残ったすずめの涙ほどの金も、書類の書き賃でごまかされ、すっかりしほり取られてしもうた、どうやって辛抱するんじゃ。『とどめは』カビール曰く、聞け尊者よ、くる日もくる日もただ働きで、タンバリン叩いて歌唄う。(これじゃまるで) バタクナート・ギルダリー、どうやって辛抱するんじゃ」(I—15) 「... ラチミーを甘く見ちゃいけないよ。あの女の毒牙をうまく抜かないと、あんたの住職さんは毎日タンバリンを叩いてバタクナート・ギルダリーって歌うことになっちまうよ」(I I—6) 初めの用例はミティラー地方の村芝居ビダーパト・ナーチの道化の歌で、なるほど一文無しである。また両方ともタンバリンを叩きながら歌を唄うのは、そのようにして施しを求めるのだろう。なお後の用例は、住職がタンバリンの名手であることに引っ掛けている。

14、phardī (I—16)

白の高価な。[O], U [p100] の訳語は kinārīdār = 縁飾りのついた。両者に差があるが、いずれにせよ高級品の衣服をさす形容詞であろう。「村全体でサリーが7着しかもらえません。うち4着は phardīで、旦那衆の家で着るものです」

15、karcā (I—29)

葦ペン。kaṇḍā (sarkaṇḍā = 葦、の仲間) を削ってつくる。kiric ともいう。[以上 R] 「帳簿類、墨、それに葦ペンは他人の手に触れさせちゃなりません」

16、cakai ke cakdhum (I—32)

囃し言葉、特に意味はない。[V], 「チャカエケチャクドゥム、煎りトウモロコシ (マカエケラーヴァー) ... この世の貧乏人から金をしほりとった奴」

17、akhatā (I—38、I I—14)、akhatiyā (I I—22)

早く稔る、早稲の。J [p52] ‘akhatiyā’ (pahale hī taiyār hone wālā) pāt、すなわち (真っ先に稔る) ジュート、とあるのに拠った。「バードーン月になる早稲の田圃が稔った」(I—38) 「1948年4月のある朝。この地方で早生(わせ)のジュートやバードーン月に稔る早稲を植える農民は日の出前に畑でひと働きしないとイケない」(I I—22) また N [p125] にはこの語は agata の形であらわれ、その脚注にはさらに明瞭に「他の品種の稲よりも早く稔る、早く植えられる」とある。

18、khurkhār (I—42)

ごたごた、ごそごそ。たとえば机などをゆすって「ごたごた」音を立てること。khurkhāmat karo と言えば、「ごたごたするな、静かにしろ」の意味。転じて、ここでは騒動、もめ事の意味での「ごたごた」として使われている。[以上R] 「なぜかと言うにですな。実際今回のごたごた、土地からの追い立ても競売もすべてハルゴウリーバーブーが始めたことですからな」

19、caukhṛā ghar (I—43、II—9、10*、20)

周囲が吹き抜けで上部のみに覆いをした四角い大型のあずま屋。広々とした美しい立派な建物で、集会所、寺院などに多く用いられる。[以上R] テキストで caukhṛā ghar が用いられているのは村の社会党の集会所 (I—43、II—10*)、僧院をでたラチミーがバールデーオと住んでいる竹と藁でつくったバンガロー (II—9)、およびカリムッディーンブルにある役人用の大きな宿泊施設 (II—20) である。いずれも建物の構造や用途が上記の説明にあてはまる。

20、kāhe — kūhe (II—6)

カーボーリー。BL [p43] にでてくる kāh — kūhe の脚注に ‘ka’, ‘ko’ wālī bolī, hindī—urdū, すなわち「k a、k o (の、を) 言葉、ヒンディー語、ウルドゥー語」とあるのに拠った。「パンチャヤトでは家で話すような言葉を使ってはならぬというのが昔からの掟だ。のを言葉、つまり裁判所で使われるようなウルドゥー語 (kacarāhī—mogālāhī) が達者なほど、よいのだ」

21、batac (II—7*)

くそ、ええい、畜生。いまましい気分やいらだちを表わす間投詞。以下の2つの用例からそのように判断できる。「じゃがどうしたのだ、おい。半分言いさしにして、batac (くそ) ... あとの半分は腹にしようたか...」『400人!』警部はびっくりすると、目がフクロウみたいに丸くなる癖がある。『4... 400人! batac (ええい) ... そんなに多くの娘とどこで知り合ったんです』

22、is (II—11、18) iss (II—23)

間投詞で特に意味はない。口癖のようにして用いられる。[以上R] 『イスイス』タフシールドールも胸を締めつけられる。「カマリーの母さん。娘は私の前にはもう来てくれるのだろうか...」(II—11) 「イス... お前さんたちはほんに臆病者らしい。商人の心臓はノミの心臓とはよう言うたものじゃ」(II—18) 「イッス。まるで物語みたいなことじゃ。まったく誰も知らなんだとは」(II—23) またこの語は、T所収

の短編「ティースリー・カサム（三つ目の誓い）」でも主人公の御者の口癖として効果的に用いられている。一例をあげると [p110] 「『俺の名前... 名前はヒラーマンだ』女が座席ではほえむ... かおるような微笑。『だったらあんたのこと、おまえさんて呼ぶことにするわ、おにいさんじゃなくて。私もヒーラーていうのよ』『イッス』ヒラーマンには合点がいけない。『男の名前と女の名前じゃちがうとも』」以上の用例からは、軽い驚きや感情の高ぶりを表わす語であるように思われる。なお（I—5）では isbis の形で一種の強調形として用いられている。「すると兵隊はわしの手に針を刺しましたが、わしはイスビスとも言いませんでした（うめき声一つ上げなかった、の意）」

23、sampanī (I I—9)

飾りたてた上等の牛車。英人が利用することもあった。[R] 「結び目、特に轅（ながえ）に結んだ紐には七色の輪っかがついている。... 子牛の頭にはキンマの葉をあしらった真鍮の飾りをのせ、首には貝殻の首輪と鈴をかけている。... パールデーオ尊者さんの bagghī・sampanī が出たぞ」 また他の作品には次のような用例がある。 J [p104] 「(ビフラー・ナーチの) パーラー・ラキンダル (に扮した役者) は、ゴリヤル村の花婿の衣装で、sampanī・gārī から降りてくる」 T [p151] 「たった今バルラームブルの旦那の sampanī・gārī が、モーハンプルの宿舎にお役人様を迎えにいったところじゃ」いずれの用例からも上等の牛車であることがうかがえる。また P P [p 88, 366] では、それぞれ地主の家族の乗る牛車、英人の乗り物として登場する。

24、ghaskantobācaḥ (I I—18)

いなくなれと言うたに、失せろと言ったのだ。ghaskant は動詞 ghisaknā と関係する語で、いなくなれ、失せろの意。それに、言ったという意味の ubācḥ (Skr. uvāca) が加わった言葉。たとえば気に入らない人物が自分のそばにいて、その者を退散させたい場合にこの言葉を用いる。[以上 R]

「よいか、カリヤーは『おらんようになれ』になってしまったのじゃ。社会党の名もカーリーチャランの名も... 絶対口にするな」カーリーチャランが脱獄して行方不明になったことを、この言葉で表現したのである。ちなみに U [p327] には farār (逃亡した) という訳語が与えられている。

25、manakuttā (I I—22)

小作料をあらかじめ定められた量の収穫物で納めること、物納。mana は man で重量の単位であるマウンド、kuttā は kūtanā (見積る) と関係する語。田畑を検分して小作料を何マウンドの収穫物とするかを見積ったことに由来する言葉。[以上 R] 「肩に鋤

をつないだくたばりかけの去勢牛を駆りながらビランチーが進んでいる。... コーヤリー組のソーバランの3ビーガーの畑を manakuttā（小作料物納）で耕しているのだ」

これと同じ意味の語に manakhap がある。[R] さらに K [p261] によれば manakhap と manahuṇḍā は同義である。また RC [p95] には「何千ビーガーもの土地を彼は農民たちに manakhap (kūt, manahuṇḍā) で与えてきた。1 ビーガーにつき4マウンドから15マウンドまでの率で」とある。ここで kūt は kūtanā に通じ、manakuttā を指すのだろう。したがって manakuttā、manakhap、manahuṇḍā の3語が同義語であることは間違いないと思われる。以下の用例もそれを裏付けている。BL [p169] 「manakkhap を知っとるかね、お前さん。知らんか？ほれ、取れ高の16分の1か20分の1、または10分の1を地主が取るんじゃよ、現物でな。1 ビーガーにつき1マウンド、2マウンド、または3マウンド... というぐあいに、決まっただけの穀物が年貢の額を地主のところへ納めに行くんじゃ」 BL [p170] 「マハプラーの小農300軒はカーンバハー Doll の1000ビーガーの土地を代々manahuṇḍā で耕してきたのじゃ」

三木 雄一郎 （大阪外国語大学講師）